

Title	図書館情報学とDHの関係について, Digital紅葉山文庫での経験から考えたこと
Sub Title	
Author	木村, 麻衣子(Kimura, Maiko)
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC review Keio University). Vol.12, No.1 (2025. 3) ,p.13- 17
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム：DMCシンポジウム2024記録 「知と情報と人間：デジタル知の深化と共有に向けて」 開催日時：2025年3月17日 (月) 14:00～17:00 開催場所：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース 講演2
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000012-0013

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

講演 2

図書館情報学と DH の関係について、 Digital 紅葉山文庫での経験から考えたこと

木村 麻衣子

(日本女子大学文学部日本文学科准教授)

ご紹介ありがとうございます。日本女子大学の木村と申します。私も今お話しされました橋詰先生と同様に専門は図書館情報学でして、特に目録周りですね、情報資源組織化とか言われますが、目録とかメタデータの周りを中心に研究しているのですが、今日は、三田に斯道文庫という研究所がございますが、斯道文庫の住吉朋彦先生がなさっているプロジェクトでDigital紅葉山文庫というデータベースがあるんですけれども、こちらに研究分担者として参加させていただいたという経験から、図書館情報学がデジタルヒューマニティーズ (DH) にいかにして貢献できるのかということを少し考えたので、そのことについてお話しさせていただこうと思います。

図書館情報学は、ご存じない方もいらっしゃるのと言うようにしているのですが、もともと図書館運営に関わる実務的な、いろいろな作業から発展して 19 世紀後半に成立した図書館学というものと、それから先程のお話にもありましたが、20 世紀初頭から図書館という機関に限定されずに文献情報処理技術を開発しようとしたドキュメンテーション

運動というのがありまして、それらが最終的に融合して、情報の作成、流通、組織化、検索、利用、保存、廃棄といった一連の情報のコミュニケーションの連鎖を扱う図書館情報学という学問になりました。英語では Information Science または Library and Information Science と呼ばれます。Informatics であるとか、Computer Science とはもともとその源流が違いますので、情報学という字面から、どうしても図書館にコンピュータサイエンスを適用する学問というふうに思われがちですけれども、もともとはそうではありません。ただ、近年、欧米でも学部や学科の単位でコンピュータサイエンスの学科と一緒になるというところも見られますので、コンピュータサイエンスとは一切関係ないですとまでは、今は言えません。

Digital 紅葉山文庫の紅葉山文庫というのは江戸幕府の旧蔵書ですが、今、宮内庁書陵部と、それから国立公文書館の内閣文庫というところに蔵書が分散しておりまして、これを Web サイト上で一つのコレクションとしてまとめて見られるようなものを構想されてプロジェクトが始まりました。

研究の体制としては、研究分担者 16 名、協力者 19 名と、あとはシステム開発については NPO 法人デジタルヘリテージデザインというところをお願いしていますのと、それから三田メディアセンターのシステム担当の方に、サーバー周りのこととか、システム関

係のことを見てもらうためにオブザーバーとして1名参加していただいております。

Digital 紅葉山文庫のトップページ¹の「原本から見る」の部分は、いわゆる漢籍目録のようになっていて、これが分類目録の画面ですが、こちらをクリックすると書誌データが出てきて、右側に書影がありますが、この下をクリックしていただくと、III F 準拠の本の全文の画像も出てきます。トップページの上の方には「史料から見る」と書いてございますが、紅葉山文庫には歴代のその時々目録というのがありまして、その目録と今の本の書誌データとをリンクしてつなげて見せるという構想です。この歴代の目録の翻刻というのもこのプロジェクトでしておりまして、その翻刻を今のところこれはデータベースというよりは、HTML ベースで目録を載せている形ですが、このように載っていて、対応する書誌データがあるものはリンクが貼ってあります。

歴代の目録は、今のところ公開されているのは、元治増補御書籍目録というもので、これが4つのパートに分かれていて、最初の方は普通の目録ですが、最後の方がですね、このような形で、目録というよりは、文庫でこの日に何があったとか、この本の出納がなされたとか、そういう記録の部分がついてい

まして、この部分と合わせて目録部分を扱うというのがちょっと大変だったところになります。今のところこの形ですが、プロジェクト自体がこれからも続く予定ですので、最終的にはもう少し違った形のものになる予定です。

ここで私が何をしたかですけれども、まずはデータ入力用のフォーマットを作りまして、これはDigital紅葉山文庫の前にまた別の宮内庁書陵部漢籍集覧²という Web サイトがあるんですけれども、こちらは今も動いているんですが、その時はテキストベースのフォーマットで書誌データを記録していたのですが、それだとちょっと取り回しが利かないところがありますので、Excel ベースの入力用のフォーマットを作りまして、こういう検索がしたいというご要望があったので、それに応じてデータ項目を切り出すというようなことをしました。そして、研究分担者、協力者、非常に多いので、その方々がお作りになった書誌データを、内容面のチェックは住吉先生がなさいますが、形式面で、齟齬がないように私がチェックをしたりしました。システムの方は要求仕様メモを作りまして、その後もやっぱりこれもやりたいというようなこと、いろいろ出てきたりしますので、仕様の調整をしましたり、あとテスト環境にデータを試

¹ <https://db2.sido.keio.ac.jp/momijiyama/>

² <https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki/>

しに入れてみて、それが上がってきた時にリンクがうまくいっているかのチェックをしたりとか、ヘルプを作成したりといったようなことをしました。それから私が一つ役割だったと思っていることとして、研究者と開発者の間の通訳的な役割を担ったと思っていました、これをもう少しご説明します。

開発者の方はもちろんシステム開発される方で、研究者というのは人文系の研究者です。時々やはり用語がですね、コミュニケーションの中でその用語の意味するところがうまく伝わっていないというようなことが見受けられることがあり、もちろん常にそうではないのですが、そういう時に私の方で、これは今のこういうことです、これを作んなきゃダメってことです、とかいうふうに補足をさせていただいたりしました。それと、開発者と研究者の間で、研究者がこうしたいなと思うことがあった時に、希望をそのまま直に伝えるのではなくて、私の方でワンクッション置いていただくことで、こういうデータを入れておいたらこういうことができそうですとか、実現可能そうな形で開発の方に伝達をしたり、あるいは私から見て、それをやるのはかなり厳しいかもと思った時には、あらかじめ研究者の方に「先生、それはちょっと難しいかもしれません」というようなことをあらかじめお伝えするというようなことで、ちょっとワンクッション置くことでコミュニケーションがスムーズにいった面があったか

もしれないなと思っています。

あとテスト環境ができてきた時にですね、研究者の方がこれおかしいという風になるわけですが、それがおかしいのはデータがそもそも間違っていておかしい場合と、あと仕様上、期待と違うことが起こってしまっているけれども、でもそれは仕様だから仕方ありませんという場合があるので、それをこれは仕様なのでっていうふうな説明をしたりとか、あるいは本当に実装の方で何かミスがあることもあるので、その実装の部分だけ開発者の方に戻すと、いうようなことをしました。

あとは、これ図書館的だなと思っているのが、ユーザー視点と長期的な視点というのも提供できたんじゃないかなと思っています。DH のプロジェクトの場合、研究者はコアユーザーなので、自分が使いたいものを自分でこういうふうにしたっていう、やっぱり強い気持ちがあって作るわけですが、一般に公開されるサービスなので、ライトユーザーとか、一般のユーザーもそこに見に来る可能性がありますので、普通の利用者はこういうふうに使うんじゃないとか、そういった視点を私の方で提供できたかと思います。あとは作って終わりではないので、その作った後で、これをずっとこう運用していくためには、あまり複雑なシステムにしない方がいいとか、あるいは ID を絶対変えないでほしいとか、長期的にこれを運用していくための視点というものも、私の方でご提供できたかな

というふうに思っています。

こういった通訳者に必要なスキルって何なんだろうというふうに考えてみますと、私は図書館で目録を作っていましたので、どのような細かさでどの程度正確にデータを作ったら、どういう検索ができるのかというのは、わりと身に染みているところがありまして、メタデータ設計と作成のスキルというのが、今、通訳者をする上で必要なスキルだったかなというふうに思っています。それから、データベース、Web サービス開発経験、大して経験はないですが、すごく小さなシステムですが、院生の時に蔵書印を検索する簡単なウェブサービスを試験的に運用していた経験がありましたので、その経験も非常に役に立ったと思っています。あと、ドメイン知識で、これは私もそこまで詳しいわけではもちろんないですけども、もともと興味を持って漢籍については勉強していたということと、今回このプロジェクトに参加させていただいて、私も実際に書陵部の方に行って原本を見てですね、書誌データを取るというようなこともさせていただきました。もちろん私が作ったデータをそのまま載せるわけにはいきませんので、住吉先生がほとんど直してくださったわけですが、何回かそれを繰り返して、少しずつ知識がついてきたかなというところもあります。そして、あとは図書館員時代に培いましたサービス精神というのかなり大きなウェイトで必要だったかなと思っています。

す。

こうした通訳者が不要なケースというのがもちろんあると思います。一つは、人文学者がデータ整備からシステム開発までできる場合で、これができる人を人文情報学者と呼ぶのかなと思うのですが、このケースでは通訳者はいないかなと思います。さらに、開発者の方にドメイン知識があるという場合、この場合もいないかなと思います。それでもユーザー視点と長期的な視点というのは、図書館的な視点として提供できる可能性はあるかなと思っていますが、相対的な必要度は下がると思います。ただ、おそらくDHのプロジェクトで、そこまで頻繁にこの2つに当てはまるケースはないかもしれないなとも思っています。

この2つのケースに当てはまらず、いろいろな分野の人が力を合わせてプロジェクトをしていくというときに、図書館情報学が貢献できる部分があるのではないかなというふうに、今回の経験を通じて考えました。

一つは、通訳的な役割が果たせるのではないかな。これはただ、ドメイン知識は多少必要にはなると思います。それから、図書館情報学に固有の部分として、情報資源組織化の知識と技術というのがありまして、メタデータスキーマを作成したり、データチェックをしたりするっていうのが、図書館情報学の人にはわりとちゃんとできるだろうと思います。それと、先程述べましたユーザー視点、長期

的視点の提供、これもできるだろうと思います。以上は図書館情報学の研究者でなくても、図書館員であればだいたい持っているスキルなのかなというふうにも思っています。ただ、図書館員が一つのDHのプロジェクトにべったり張り付くというのは、なかなかこう、スタッフが足りませんので、難しいかなというふうにも思いますので、張り付き人材を出すためには予算が必要であるし、教育も必要だろうというふうに思います。今回三田メディアセンターのシステム担当の方にオブザーブしていただけたのはとてもラッキーだったなと思っています。

ということで、最後に課題として4つ挙げました。図書館情報学がDHに貢献できるのでは、というお話ですけれども、どうしてもその情報学という字面からですね、図書館情報学者を入れると、Web データベースサービスを丸ごと作ってくれるのではという期待を持たれてしまう可能性があるなと思っています。できる図書館情報学者もいるので、もちろん絶対できないということではないですが、ここはちょっと期待値をはじめから揃えておかないと厳しいかと思います。そして一番貢献できているこのメタデータの整備の部分ですが、ここはメタデータをどの程度きっちり作らないといけないのかということについて、一般に十分な理解がなされていない。これは私の所属先も日本文学科なので、常々思うところですが、きちんと

作らないと検索できないんだってということがなかなか伝わらないので、これが伝わってないと、図書館情報学の人を入れるメリットも伝わりませんので、そこがなかなか難しいところだなと思っています。

それから図書館情報学の側の問題点として、やはり多少ドメイン知識がないと厳しいですね、何のプロジェクトをお手伝いするかによりますが。学部から図書館情報学をやっていると、私もそうですが、図書館情報学の外の世界のことを、なかなか知る機会がないということがありまして、私は非常に今回機会をいただけてラッキーだったと思いますが、そういうチャンスがないと、なかなか他のドメインの話をきちんと勉強する機会がないかなと思っています。

そして、情報資源組織化の専門性の衰退で、これは図書館情報学の中でも情報資源組織化の分野の知識を生かして、図書館以外の世界でも役に立つという話をしたいわけですが、情報資源組織化の専門性自体が、今情報資源組織化をやっている人が図書館情報学の中でも減ってしまっていて、とてもマイナーな分野になりつつあるというところがなかなか難しいところで、これだといざお手伝いしたい時にできないということになってしまうので、ここの専門性を、ちゃんと人を育てていかないといけないというふうにも思っております。

私からは以上です。ありがとうございました。